

「Lure, Decoy, Camouflage」

狩野哲郎 (かのうてつろう) /アーティスト

2018年5月4日から6月30日までの間、本年度で2回目となる遊工房アートスペースとFinland Artists' Studio Foundationによるアーティスト・レジデンス交換プログラムにより初夏のヘルシンキ滞在の機会を得た。 北欧諸国への渡航経験は今までなかったが、自分の近年の制作テーマである自然と人間の関係性について考える中で、漠然といつか行くかもしれないと思われる場所のひとつであった。 このプログラムの公募が行われていた、2017年の秋頃、酷暑のアメリカ西海岸でのレジデンス参加を終えたのち、展覧会のための制作で雨季への変わり目のシンガポール滞在が始まったところだった。 長い夏への反動のようなもので、その時には南国から北方でのいくつかのプログラムにアプリケーションを書き、幸運なことに夏のフィンランドと冬のノルウェーのレジデンスに参加できることとなった。 いつか行く国で自分が見たかったものとは何かを確かめるための滞在は始まった。 現地制作のインスタレーションや立体作品を中心とする自分のようなアーティストの場合、2ヶ月ほどのレジデンス・プログラムでは少なくとも2つのパターンがあるように思う。ひとつは展覧会の枠組みや規模が決まっていて、それに向けて事前に新作のプランや素材を準備し現地で制作をするパターン。 もうひとつは現地でリサーチした素材から、作品やその手がかりをかたちに落としこむパターン。 今回は滞在中にオープンスタジオを開催するが、リサーチ中心の予定を組んだ。

近年取り組んでいる、生物の世界認識について想像するための自然物と人工物を使ったインスタレーションは様々な分野や領域の学説、知見、経験からインスピレーションを受けているが、今回のフィンランド滞在中において、特に関連性の強いテーマとして「渡り鳥のルート」と「狩猟文化」があり、これらに関連のあるところからリサーチをスタートすることとした。「渡り鳥のルート」については北方への滞在を決意させた動機のひとつで、鳥取で見た白鳥たちが日本海を沿って北海道、ロシアから北極圏へと至ること、そしてそのルートを先天的に知っていることへの憧れからはじまったものである。 この事実はリサーチ対象としての水辺と湿地を自分が歩くことの原点となっている。 港町と1000の湖の国がどのようなフィールドで、その国の人々がどう捉えているのかを知ることは、荒野、山野、島の国の人々と比較する価値があるであろう。「狩猟文化」についての興味は、生物について考え始めた初期に自身で狩猟免許を取得し、猟師の知識と経験を調べ始めて以来の対象である。 野生動物の生態に想像を巡らせる時、飼養動物のような飼育の入門書や環境づくりのノウハウは極めて少ない。 日本においては、獣や鳥を捕獲する際に「罠」や「網」も少なくなく用いられてきた。 優れた罠は、動物に危険を察知させない、あるいは危険に優る魅力をもつものである。 猟師によって蓄積、改良されてきた罠や網の形態や構造について知ることは、動物によって知覚される人工物（自作における彫刻的なもの）と関係が深いと考えている。 フィンランドにおいてはハンティング、フィッシングが盛んであり、ヘラジカやトナカイ、アザラシやヒグマ、そしてサーモンのルアーフィッシングなど少し見渡すだけでも日本とは異なる状況であろうことも想像された。 その中でも伝統的に用いられてきた疑似餌（ルアー）や罠による水鳥猟（デコイ）をリサーチの起点として設定した。 ルアー及びデコイは使われ始めた当初は猟師／漁師自身が木材を削り、形態を検討し制作された。 動物によってより知覚されやすい人工物をつくるという意味において自作とも通ずるところがあり、興味深いものであった。 また、狩猟の方法は原初的なものに遡るに従って異なる地域でも似通っている事が多いが、動物相の違いにより、自ずと狩猟対象やフィールドに最適化された方法へと独自化される。 これは、現在世界中で有名メーカーのプロダクトが流通している状況では見落としがちだが、ヴィンテージ品（プロダクトがローカルだった時代のもの）を現地調査で参照することによって、見えやすくなることへの期待もあった。 以上が事前に設定した調査対象である。 同時に、それらの調査の過程である種偶発的に出会うことになるものごとも、レジデンス・プログラムに参加するにあたって重要なチャンスとして考えている。 直感的に興味を持てることへの積極性を持ち、それに従うことで事前に設定できなかった、未知の題材の獲得へとつながること期待して行動している。

迷彩柄（カモフラージュ）は現地で見つけた題材の一つである。迷彩技術はソナーやレーダーなど近代的な索敵・測距技術が開発される以前の時代に、目視および光学視差式距離計（レンジファインダー）に対する幻惑を目的として研究された。特に100年ほど前にイギリスで研究されたダズル迷彩は変則的な幾何学模様を配置したもので、錯視の効果によって距離を誤認させるといった理論のもので、幾何学的抽象に連なるものと捉えられる。フィンランドでは公園や林の中の歩道を歩くなかで、時代を問わず建造物や人工物が木々の間に非常に馴染んでいた印象があった。それを設計する人々の日常的に持っている色彩感覚の違いなのかどうか調べているうちに、現在フィンランド軍に採用されているM05迷彩というパターンにたどりついた。M05迷彩はフィンランド森林研究所の森林写真のアーカイブとVTT技術研究所の解析によって開発されたもので、それは言ってみればフィンランドの森林全体の現代の抽象画のようなものであるとの印象も受けた。そこにいる人々と動物の日常的に見ている色彩の幅を知ることは、滞在によって得られた収穫の一つであった。

自身が事前に期待した結果を回収することにのみにこだわらず、柔軟性を失わないようにすること。調査目的に最短距離で向かうことは、限られた期間の調査において効率的ではあるかもしれないが、寄り道を厭わないことで見つけられることもある。「公園で老婦人がカモメにパンを撒いている」ことを見た時にそれが食パンの耳でもなく、ブリオッシュでもなく、固くなったバゲットでもなく、ライ麦パンであることに気づくためには「スーパーで注意深く好奇心を持って買い物をし、フィンランド風のサンドイッチを作って食べる」という経験が必要である。そういう経験は自分の持っている尺度との違いや共通項を想起させて、2ヶ月の間気づきを与え続けてくれた。そしてまた、僕がライ麦のパンを食べた時にフィンランドのことを思い出すきっかけとなるだろう。